



Title	橋本平八の木彫 : その特性の考察
Author(s)	福江, 良純
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 154-155
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52939
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

橋本平八の木彫

— その特性の考察 —

福江良純／京都工芸繊維大学博士後期課程

橋本平八（1897-1935）は、大正末期から昭和初期にかけて院展で木彫を発表した、近代日本彫刻史における主要作家の一人である。生前より彼は、独特のフォルムと奇妙なテーマ性から異色作家と評され、周囲の関心を集めていたが、39歳という若さで急逝した。今日なお、現代作家の興味を喚起する橋本であるが、その特異な造形性についてこれまで十分な論究がなされてきたとは言いがたい。

これまで橋本の造形性は、木彫が伝統的に担う精神性との関係で理解される傾向にあった。これは木材の性質に依拠する木彫という分野が招きやすい評価とも言えよう。確かに、木彫は木材の持つ有機的な素材感に支えられてきており、そこには木材に固有の性格を前提とする意識が潜んでいる。素材としての木材には樹木の生命感や親和感といった情緒性や霊性など、精神的意味が投影されており、木材はその特質を通してそれら内的なものを生かしてきた歴史を持つ。木材に与えられた精神的意味と木材の特質の同一視は、実際に素材に触れることで感知される性格のもので、これは日本的なモチーフを採用する木彫家の意識一般でもある。

だが、橋本の木彫観はこうした伝統的な制作意識と相容れない。作品《アナンガランのムギリ》（1932）や制作に関わる橋本の言説を検討するなら、橋本が伝統の木彫観を撤廃し木彫を伝統の制約から解放しようとしていたという主張を導きだすことが出来る。この試みこそが橋本の造形的な特質であり、それは技法的痕跡として確認できるものである。

今回は橋本の造形的特質の解明ために、

《石に就いて》（1928）を取り上げた。この作品は、橋本の死後公刊された遺稿集『純粹彫刻論』（1941）における造形意識との関連が最も明瞭であり、橋本の造形的特質を取り出す有力な手掛かりと思われるからである。

《石に就いて》は昭和3年（1928）、日本美術院再興第15回展に出品された橋本の主要作品の一つである。これは、高さ10cm足らずの丸みを帯びた天然石をモデルに用いて、楕円で丁寧彫り出した全高30cm足らずの小さな木彫作品である。木材を用いて、天然石を再現するという逆説的な作品は、自然の現象をありのままに観察しそこから法則性を見出そうとする態度、橋本の言葉を用いるなら「自然科学的な」彫刻観に貫かれている。伝統木彫が素材を理解し素材を生かす態度を重んじたように、彫刻の形態は素材の種別と固有の技法によって人為的に形成されてきた。だが『純粹彫刻論』から浮かび上がる橋本の造形意識は、人為的なものを排し天然の造形的な営為に倣うことを重視するものである。

橋本は「石」を無作為な「天然」の作用そのものを体現するものと捉えていた。橋本にとって制作行為とは、天然の営為に倣って彫刻を現象させることであった。そのためには、素材の種別を撤廃し素材と結びつく技法を解体する必要があった。そして、木材を通じた石の「彫刻」という逆説的な制作を可能にしたのは、解体された技法の純粹かつ無条件な適用であった。

本発表においては、応用的技法の現れとして、《石に就いて》の表面に多数確認できる特徴的な線刻に注目した。この線刻は、鑿で

丹念に造形された面の上から、いわば引っ掻き傷をつけるように刻まれたもので、鋭利な何かで彫り込まれたものではない。刃物の切れが問われる木彫においては例外的とも言える技法である。橋本が線刻として引っ掻き傷を採用したことは、当然任意である。モデルの原石にも線を思わせる要素は認められるが、引っ掻くことの形態的な必然性はなく、線刻を重視する橋本の創意によるものとみてよい。

線刻が木目に引っかかり破線状に延びる様など、それを施す行為の痕跡のうちには、橋本が木材を扱う実感が推測される。この木材の扱いは、木材の素材感を揺さぶり、旧来の木彫が形態と素材の間に形成してきた限定された関係に疑問を投げかけるものといえる。素材との接触は、彫刻家にとっては形態を導く直接的な動機であり、素材を扱う実感に形態生成の根本的な因子を潜ませる。打ち込まれた鑿が鋭利な切れを發揮する感触は、次の形態処理の意欲を刺激し造形的態度を導く。このようにして、彫刻の形態は素材と技術の適用法との絡まりで紡ぎ出されてくる。特に木彫の場合、造形性は木の特質を生かす方向へ作用し、木彫は「木彫」になるべく導かれていく。木材の特質に深く根ざす木彫は、木材を扱う特有の造形感覚を養わせ、固有の技法領域を發達させてきたのである。このことを考えるなら、橋本が用いた応用的技法、刃物を通常の状態で使用せずかつ木材を傷つける線刻は、旧來分ちがたく結びついていた木彫と木材の関係を意識の中で切り離すものと言えよう。石の存在を通じて天然の創造的営為を模倣して造形する時、橋本は木材の人為的な諸条件を滅殺させ、天然の状態に還元する必要があった。ここに、木材という素材の因習からの解放がある。

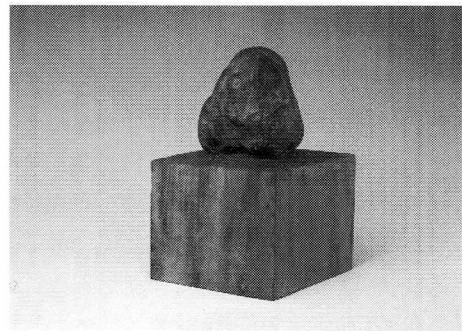
さらにいま一つ重要なことは、その解放が木彫に対してではなく「彫刻」そのものの可

能性に向けられたものであった点にある。

《石に就いて》の特徴的な線刻は、あたかも粘土や石に対して人類が最初に施した彫刻行為の瞬間に相当するかのようである。原初の天然状態の素材として木材を扱うことで、橋本は木彫を塑像や石彫と同列の「木製の彫刻」として自立させたのである。

橋本はこのように、木材の新局面を展開して、新しい彫刻素材として制作に臨んだ。そこに橋本の木彫家としての異色性があり、彫刻家としての現代性があると言えよう。

橋本にとって、彫刻は作為のない制作の結果であった。その制作観は彫刻のフォルム自体より、形象化の過程、すなわち制作という行為そのものに重心を置くものと言えよう。その意味で橋本は、創造行為自体を彫刻のテーマに据えた、日本で初めての現代彫刻家なのかも知れない。



《石に就いて》

1928

三重県立美術館 H: 28cm